予想問題 1　ヤングケアラー

〔1〕問 1 型・45 分

次の文章を読み、後の問いに答えよ。

病院の外来で、祖母の付き添いに来ている中学生に会うことがある。医師の説明を、祖母の代わりにうなずきながら聞き、薬の袋を受け取り、次回の予約を自分の手帳に書き込む。礼儀正しく、受け答えもはっきりしている。医療者はその子に「しっかりしているね」と声をかけ、診察室を出ていく背中を見送る。そしてそれきりになる。

家族の世話を日常的に担っている子どもを、ヤングケアラーと呼ぶ。国の調査では、中学 2 年生の 5.7 パーセント、高校 2 年生の 4.1 パーセントが、家族の介護や世話をしていると答えた。1 日に 4 時間以上を費やしている子どもも珍しくない。学級に 1 人か 2 人はいる計算になる。にもかかわらず、彼らの存在は、支援する側からきわめて見えにくい(1)。

理由は三つある。第一に、本人が自分をケアラーだと思っていない。生まれたときからその生活であれば、それは介護ではなく、ただの家のことである。第二に、家族の状態を他人に話すことは、家族を裏切ることのように感じられる。病気のこと、障害のこと、経済のこと。子どもが最も守ろうとするのは、しばしば自分ではなく家族の尊厳である(2)。第三に、周囲の大人が気づかない。遅刻が増え、宿題が出てこず、部活を辞める。その一つひとつは、怠けや反抗として処理されてしまう。

そして、最も厄介なのは、彼らがしばしば「えらい子」として高く評価されること(3) である。よく手伝う、優しい、年齢のわりに大人びている。その評価は本人にとって、数少ない自己肯定の根拠になる。だからこそ、助けを求めることは、その評価を手放すことを意味してしまう。称賛は、善意のかたちをした鍵になり、本人を役割の中に閉じ込める。

支援とは何か。家族のケアをすべて肩代わりすることでも、家族から子どもを引き離すことでもない。多くの子どもは、家族を大切に思っており、ケアを続けたいという気持ちを持っている。必要なのは、その子が「やめる」「減らす」「誰かに頼む」を選べる状態を取り戻すこと(4) である。今日は部活に行く、今日は友達と帰る、今日は自分の勉強をする。その選択がありうると本人が知っているかどうかで、同じ生活の意味は変わる。

医療者は、家族のいちばん近くにいながら、家族の中までは見ない立場に置かれやすい。処方の対象は患者であって、その隣に立つ子どもではないからだ。しかし、薬の説明を子どもが聞いているとき、その子は確実に医療の一部を担っている。診察室で「しっかりしているね」と言う前に、「あなたは今、困っていることはない？」と聞ける医療者であるかどうかが、この問題の分かれ目になる(5)。

（本教材のための書き下ろし。統計は厚生労働省・令和 2 年度「ヤングケアラーの実態に関する調査研究」による）

【設問】

(1) 傍線部 (1)「彼らの存在は、支援する側からきわめて見えにくい」のはなぜか。本文に即して **120 字以内**で説明せよ。

(2) 傍線部 (2)「子どもが最も守ろうとするのは、しばしば自分ではなく家族の尊厳である」とはどういうことか。**60 字以内**で説明せよ。

(3) 傍線部 (3)「「えらい子」として高く評価されること」が、なぜ「最も厄介」なのか。**100 字以内**で説明せよ。

(4) 傍線部 (4)「その子が「やめる」「減らす」「誰かに頼む」を選べる状態を取り戻すこと」を支援だと筆者が考えるのはなぜか。**150 字以内**で説明せよ。

(5) 傍線部 (5) のように筆者が考える理由を示した上で、**誰かのために自分の時間を使った自己の体験**をもとに、あなた自身の考えを **400 字以内**で述べよ。